

学 会 抄 録

日本泌尿器科学会 第 5 回中部地方会

昭和29年10月 3 日

於 金沢大学医学部

1 性病に対するバイシリン療法

今北力, 藤山亮市, 前川正信
井本勢太郎, 野村貞一(阪大)

バイシリンを淋疾並びに梅毒に使用して次の成績を得た。即ち淋疾では内服 4 例 60万~120万単位を使用し, 120 万単位を用いて始めて効果を認めた。注射の場合はゾル 60万~100 万単位を使用し 60万単位以上を使用すると急性淋疾に治淋効果を見ることが出来る。梅毒の場合無症候晩発先天梅毒血清には影響を及ぼさなかつた。二期梅毒感染後10年を経たものでもバイシリン 600万単位, プロカインペニシリン 600万, ペニシリンG 600万で血清反応の陰性化を見た。

2. Bicillin による性病治療

田村峯雄, 藤井達郎(大阪市大)

Bicillin を用いて淋疾と梅毒の治療を行っている。尚実験中であるが, その一部を報告した。

3. Bicillin を以てする淋疾並びに梅毒の治療

川村太郎, 並木重吉, 和泉俊治
上出一郎(金大), 田中弘(金城園)

吾々は S_1 7 例, S_2 3 例, S_{6a} 1 例, S_{6b} 4 例, S_{6c} 1 例, C_8 1 例の合計17例にバイシリンを以て駆梅療法を行つた。投与方法は持続血中有効濃度を考慮し, 1 回投与量を 240万単位及び60万単位とし, 前者は2週間隔で症期に応じ1乃至数回, 計 240万単位乃至 720万単位。後者は2日間隔及び5日間隔で4乃至 10 回, 計 240万単位乃至600万単位を投与した。 S_1 7 例は 240万単位投与で全例血清陰性を持続していることは特筆に値する。又 S_{6b} の 4 例中 2 例, S_2 の 3 例中 2 例が治療中に血清反応が陰転した。現在経過の追求と共に症例の追加を行っている。副作用は注射部位の疼痛のみであつた。

淋疾に就いては性病研究班報告(第14回協議会)に於て発表した。

4. ピリミジンペニシリンによる淋疾の治療

広根孝衛(江沼病院)

昭和28年 6 月より昭和29年 6 月までの間に江沼病院皮膚泌尿器科外来を訪れた 淋菌性尿道炎患者 24 例(内急性症17例, 亜急性症 4 例, 慢性症 3 例)に対し油性ピリミジンペニシリン 1 日30万単位 2 回乃至 4 回を筋注し, 治癒率75%を得, 他もサルミックス内服, 尿道洗滌等を併用してすべて治癒せしめ得た。

尚淋菌消失後に於て12.5%にグラム陽性双球菌を認めめた。

5. Tetracyclin による淋疾及び非淋菌性尿道炎の治療

新谷浩, 日野豪(京大)

急性淋疾 6 名(内女子 1 名), 非淋菌性尿道炎 1 名に Tetracyclin を用いての治療を報告した。投与方法は12時間毎に 0.5gr 投与 3 例, 初回 0.5gr 以後 6 時間毎に 0.25gr 投与 1 例, 毎 6 時 0.5gr 投与 3 例で, 総量平均 3.25gr であつた。

淋疾 6 例中少量投与を行つた 1 例のみが 1 週間で再発した他は全治した。非淋菌性尿道炎に対しては毎 6 時 0.5gr 総量 6gr 投与し症状は消失したが 1 カ月後に再発した。上記各投与方法につきその血中濃度を測定したが, 初回投与後 2 時間で血中濃度 $1\gamma/c.c.$ に達し, 以下それ以上の濃度を持続した。副作用は全く認めない。

6. アクロマイシンによる淋疾治療

桜根好之助, 田村峯雄, 門脇和敏(大阪市大)
山本俊一, 磯典理(大阪市衛生局)

Achromycin を以て男子急性淋疾80例を治療した。Achromycin の投与方法は250mg カプセルを最初 2 個, その後は 1 個宛 6 時間毎に経口投与した。1.0g 投与群42例では治癒率は78.6%で 4 例に Urethritis postgonorrhoea を胎した。2.0g 投与群38例では治癒率 92.1%で, 6 例に Urethritis postgonorrhoea を胎した。尚 Achromycin-Triple-Sulfas 4 錠(2.1.1.6 時間毎)投与群 14 例では治癒率 100%で Urethritis

postgonorrhoicaは1例であつた。

7. エリスロマイシン（エリスロシン、アイロマイシン）による淋疾の治験

川村太郎，○西原勝雄，谷口馨（金大），
上出一郎，田中 弘（石川県金城園），
近小弥太（金沢市保健所）

急性尿道炎に対し，エリスロマイシン療法を試み見るべき結果を得た。即ち(1)金大皮泌科及び金沢市保健所に於ける成績は，0.3g宛毎6時間4回計1.2g投与により11例中9例全治，2例は若干量の追加により治癒した。(2)石川県金城園に於いては0.3g宛毎6時間4回計1.2g投与では5例中3例全治，2例は追加投与を必要としたが，0.4g宛4回計1.6g投与の5例は全例全治の成績を得た。(3)副作用は全例に於いて之を認め得なかつた。

8. Aureomycin による淋疾治験例

近小弥太（金沢市保健所）

男子急性淋菌性前部尿道炎9例，女子頸管淋2例計11例にオーレオマイシン 250mg 1錠宛6時間毎に経口的に投与し，次の様な成績を得た。排尿痛は約6時間～8時間平均7時間で軽減し，8時間～14時間平均10時間で減少，約14時間～24時間，平均20時間で其の停止を見た。淋菌は細胞内には約24時間以内，細胞外は48時間後に於て完全な消失を見た。総量 1.0g で全治せる者7例中5例治癒率70%，総量 1.5g で全治せる者（但し1.0g の不治癒の2例を含み）6例中全治5例治癒率83%を得，女子1例は2.0g で全治を見，淋疾治癒には少くとも1.5g 以上の投与が望ましい。1週間後に於て培養するに全例に於て淋菌を検し得なかつた。

9. 泌尿器感染に対するアクロマイシンの使用経験

川村太郎，蔵孝保（金大）
寺田稔（富山市民病院）

泌尿器感染症に対しアクロマイシンを成人1日量1gを6時間毎に分割投与し，小児には体重 kg当り12.5～20mgを基準として投与した。急性膀胱炎4例中著効3例，効1例，慢性膀胱炎2例中著効1例効1例，急性腎盂炎2例共著効，慢性腎盂炎1例効，尿道炎4例中著効3例効1例，陰門腫炎4例共著効の成績を得た。頻尿，排尿痛，排膿等の自覚症状は早いものでは第3回目の服薬時に既に軽快して居り，起炎菌（大腸菌，淋菌，グラム陽性球菌等）は1～3日で消失し，

膿球は少し後れて2～9日で発見出来なくなる。陰門腫炎の1例は9才の少女に500mg宛20日間投薬したが何等の副作用もなかつた。

10. 泌尿器疾患に対するクロラムフェニコール（クロロマイセチン）の使用経験

川村太郎，○西原勝雄，入山益四郎，
山本巖（金大）

他の化学・抗生療法に抵抗し或は従来の療法では治療困難と思われる条件下にある泌尿生殖器感染症患者のうち，感応試験によりクロラムフェニコール感受性の起炎菌を証明し得た症例19に対しクロロマイセチン療法を施行し優秀な成績を得た。副作用は全く認められなかつた。詳細は原著に譲る（1. 演者等：治療薬報，近刊，2. 河崎屋三郎：同誌，519号，3. 上出二郎：同誌，近刊）。

11. 非淋菌性尿道炎に関する研究(第2報)

新谷浩（京大）

非淋菌性尿道炎の患者より分離培養せる菌のアイソトープによる各種抗生物質に対する感受性の変化に就いて述べる。

12. 非特異性尿道炎の「マーゾニン」による治験

堀辺四郎（奈良大）

患者14名に1万～2万倍マーゾニン水尿道内洗浄を行い，5例全治，3例軽快，3例不変，2例増悪の結果をえた。試験管内に於てマーゾニン加水培地の殺菌作用を験した所100万倍まで連球菌，Candida albicans，淋菌の発育を阻止した。

13. 男子尿道炎より分離せる PPLO に就て

山本弘，石原藤太郎，大島升，
倉岡雅男（大阪通信）

本年4月日本泌尿器科学会以後，男子尿道炎患者の尿道分泌物より新たにPPLO 3株を分離し得たので，之等新株を中心に下記の通り2，3の知見を述べた。

1. 男子尿道炎の発生頻度と培養成績
2. PPLO 新株の標本供覧
3. PPLO 新株を以てした2，3の実験
 - a) 培養条件の検討：高湿度法が良い様に思えるが，之の検討は後日に譲る。
 - b) Feulgen反応：捺印標本の菌体は凡てFeulgen 反応陽性を示した。
 - c) Thallium acetate 含有選択培地に於ける態

度：PPLO 3株，Gram 陽性菌 5株，陰性菌 4株を用い，1：2500，1：1000，1：500の濃度含有培地で行った結果，PPLO は3株共に1：500に集落を認めたに比し，他の細菌に於てはGram 陽性双球菌を除いて何れも1：500には集落を認めず，Gram 陽性双球菌として2，3微細集落を認めたに過ぎなかつた。即ちPPLO 選択培地として使用するに適當である。

14. 尿路モニリア症の臨床並びに実験的研究
(仮称モニリン反応に就て)

石神襄次，渡辺昌平(京大)，
井口久男(北野病院)

抗生剤使用に伴つて発現した前立腺炎2例，尿道炎1例で局所分泌物中より *Candida* 属を証明，分離培養によつて *Can. albicans*，*Can. parakrusei* 等である事を知りえた。次で之等の生菌液を家兔皮内及び静脈に10mg 注入したが，病原性は認められず，更に培養濾液を各種患者にトリコフィチンの術式に従つて皮内反応を試み陽性率健康人26%白癬菌性疾患43.9%単純性尿道炎80%ペニシリンアレルギー100%の結果をえた。又皮内反応陽性の単純性尿道炎患者の尿道分泌物中に糸状菌の存在を認め分離培養により *Can. albicans* を確めた。

追加 金沢稔(和歌山大)

42才男子で血尿を主訴として訪れ他に耳鼻科的に *Ozena* を認めた。膀胱鏡検査で黄白色の固い粘膜塊が左尿管口に栓の如く附着，これをヤングでとり組織標本を作り培養を行つたが喀痰，尿と共に *Candida albicans* を証明したが，患者は *Sepsis* となりゲンチアナビオレット，ゲルマニン注射を行いトリコマイシン1日2g，6日間投与したが初診後2カ月で死亡した。本症は全身モニリア症の一症として尿路に血尿及び *Ozena* を認めたもので又患者は生来抗生剤を用いた経験はない。

15. 血性乳糜尿症に対するヒアルロニダーゼの腎盂注入療法による治験

石神襄次，○片村永樹(京大)

上記患者4例に各種療法を行うも治癒せず，逆行性に輸尿管カテーテルによりスブラクター(ヒアルロニダーゼ)4,000~1万単位を1回量として1~数回腎盂に注入した所6~12時間後に尿は清澄となり腰部鈍痛等は消失した。

16. フィラリヤによると思われる乳糜尿症の2例及び下肢象皮病の1例

並木重吉(国立金沢)

北陸地方に於けるフィラリヤ症侵潤度の意外なる深さを思わせるものとして，国立病院転勤以来2カ月間に3例を経験したので報告する。

17. 生殖器臓器に於ける *t. c. a. cycle* の研究(第2報)

○金沢稔，瀬川陽一，力津昌幸(和歌山大)

前回に引つづき Warburg 検圧計を用いた成績について報告する。

18. 最近の腎結核の予後

多田茂，大森孝郎，麻生田幸雄(京大)

京都大学泌尿器科教室に於て昭和22年6月より昭和27年9月に至る5年間に摘出術を施行した300例の内169例(56%)について予後を知り得たので，それについて統計的事項を述べ術後に於ける化学療法的重要性を強調した。死亡24例(14.02%)，生存145例(85.8%)であり，生存例の中全治103例，泌尿器科的には全治であるが，他部結核症を有するもの14例，未治28例であつた。

追加 後藤 武(名市大)

過去4年半に於ける腎並膀胱結核について腎病変と膀胱変化，腎摘後化学療法による治癒状況の関係をしらべ，又両腎結核にて手術不能なりし2例に対し化学療法(ストマイ，パス・ストマイ，ヒドラジッド)を行つて著効を奏し軽快したのでここに追加する。尚詳細は原著にゆづる(名市大医学会雑誌掲載予定)

19. 膀胱症状を欠く結核性腎膿腫

○田村峰雄，門脇和敏，宮垣信海(大阪市大)

18才女，26才女，15才男の3例の高度の腎膿腫を経験した。摘出腎並びに分離尿よりそれぞれ結核菌を培養して始めてそれが結核性であることを確かめた。この3例ではその経過中終始自覚的に膀胱症状を認めなかつた。培養結核菌は既往に該当薬剤を使用したことはないのに係らず或る程度の抗結核剤耐性を示し，弱毒化する人型菌であつた。そこでこの3例ではとにかく薬剤耐性を有する人型結核菌の感染によつて腎に結核性病変を来し，しかも腎に於ては *Pyonephrose* に到るまで高度の病変を示したに係らず，その菌の毒

力の低下と、いわゆる膀胱の結核菌に対する非親和性と相俟つて、ここに終始その経過中、膀胱症状を出現しなかつたということの一要因をなしていると結論した。

20. 最近11年間に於ける当科結核性副睪丸炎の統計的観察

今北力, 佐野栄春, 井本勢太郎(阪大)

昭和18年から28年に至る11年間の当科外来並びに入院患者の結核性副睪丸炎の1346例に就て統計的観察を行った。即ち同年間に於ける当科泌尿器疾患々者総数14042名, 副睪丸結核は1346例で9.6%に当り, 同年間の尿路結核患者は2450名で本症はその54.9%に当っている。その副睪丸結核1346例に就て, 年令的關係, 罹患側, 罹患部位, 腫張の大きさ, 表面皮膚との關係, 自覚症状, 並びに尿路結核との關係(兩者の合併, その時期的關係), 生殖器結核との關係, 其他臓器結核との關係, 既往歴, 更に治療に就て統計的観察を行った。

追加 岡直友, 藤野文雄(名市大)

外来患者症例については疾患が結核性なることを如何様にして確認なされましたか。名市大における最近5カ年半において, 臨床的に副睪丸結核と診断されて副睪丸摘出術を行ったもの60例, うち25例は組織学的或は結核菌培養を行ったが, これによつて結核性なることの確認されたものは15例(60%)で他の40%は非結核性炎症であつた。他の35例においては詳細な検査は行われていないが, 肉眼的に明に非結核性なりしもの8例28%であつた。我々は術前に結核性なることを確診する方法について目下検査中であり, 他の機会に報告する。

21. 男子性器結核の臨牀統計的観察

近藤厚, 石山勝蔵(岐阜大)

- 1) 昭和22年より26年迄の5カ年間の男子性器結核患者は159例で総数の5.2%に当る。
- 2) 年令は20才代が48.4%, 次で30才代, 40才代。
- 3) 畢上体の罹患は単側58.5%, 右:左=39:47
- 4) 反対側発病迄の期間は1年未満のもの多く, 一側手術せるものは然らざるもの半数。
- 5) 結核性既往合併症は65.4%, 尿路結核が34.6%
- 6) 前立腺・精囊の罹患は夫々69.1%, 43.1%。
- 7) 畢上体罹患部位は頭部44.4%, 体部30.2%, 尾部87.0%, 尾部のみ51.2%, 精管61.1%

8) 単側手術32, 両側手術27, 根治手術4, 陰莖切断1, 化学療法併用者16。

9) 化学療法併用者は然らざるものより治癒率高く他側性器, 尿路結核を後に発病するもの少し。

10) 死亡者19例(18.4%), 前立腺の変化あるものは死亡率高し(32.1%)。

22. 尿路結核の統計的観察

○西沢信二, 長田行雄(姫路日赤)

昭和24年から28年迄の5カ年に外来患者2238名の内尿路結核患者112名(5.4%)の統計的観察を行った。尿路結核患者は増加するが, 手術を行う者は減少する傾向がある。性別, 患側別では男に多く, 女では右に多い。年令的には20才に集中し, 次いで30才に多い。結核性既往症は半数が肋膜炎である。合併症では性器結核, 肺結核が夫々約半数近くを占める。初発症状は頻尿, 排尿痛が其の殆んどで来院迄の期間は漸次短くなりつつある。尿の結核菌発見率は79%。死亡率は手術を行った者には少く, 手術を行わなかつた者の死亡者の大半は両腎結核であつた。手術適応と診定して手術を行わなかつた者の内, 現在治癒状況にあると思われる者が相当あり, 抗結核剤の強力な使用により治癒する者も或る程度に認められる。

23. 腎及び膀胱結核の経過中に尿管管瘻を来した1例

○多田茂, 大森孝郎(京大)

患者は10才の男子で4年前より頻尿, 排尿困難を訴え, 初診4日前より尿が臍下縁より流出す。尿道には高度の狭窄を認め膀胱鏡検査は不能であつた。Fistulographieを行つたところ偶然にも造影剤が膀胱より右腎に逆流し, 右腎尿管結核の像が逆行性腎盂撮影を施行したと同様鮮明に現れた。即ち本症例は尿路結核殊に萎縮膀胱と尿道結核による狭窄を誘因として起つた尿管管瘻である。

24. イソニコチン酸ヒドラゼリド-N-メタン スルフォン酸ソーダ(ネオ・イスコチン第一)による尿路結核治験例

中尾知足, 近藤高夫, 山口利郎, 桂剛夫
(大阪北市民病院)

追加 多田茂(京大)

9月初めより1カ月間に来院した腎及び膀胱結核患者の内9例に腎摘出術施行前にネオイスコチンを使用して膀胱症状並びに膀胱鏡所見に於て著しい改善をみ

た。使用方法は初めの1週間毎日0.5g, 2週目より1.0gとした。副作用は認めなかつた。

25. ネオ・イスコチンによる泌尿器結核の治療

川村太郎, 藤田幸雄, 河崎屋三郎(金大)

今回は大量投与の可能なネオ・イスコチンを用いた治療成績について報告した。(詳細は原著)

26. intrasternal pyelography and nephrography

稻田務, ○後藤薫, 大森孝郎, 日野豪(京大)

岩下氏(1947)による intrasternal pyelography を追試し, 更に intravenous nephrogramm 実施困難な症例に intrasternal nephrography を試み, 其の成績を報告する。

27. intravenous nephrography

後藤薫 ○大森孝郎(京大)

Wall and Rose (1951) による本法のネフログラムに就ては, 第4回中部連合地方会, 第47回近畿地方集談会に発表した, その後の成績を述べる。

28. 経骨髄性骨盤静脈撮影法

後藤薫, ○日野豪(京大)

Drasner (1946) に始る恥骨穿刺による骨盤静脈撮影法に就ては, 既に土屋氏等の報告もあるが, 我々も本法を追試して其の成績を述べる。

追加 経股静脈性骨盤静脈撮影法

後藤薫, ○酒徳治三郎(京大)

骨盤静脈撮影法には筋膜下陰茎背静脈, 陰茎海绵体陰核海绵体, 経骨髄性(恥骨)に行う方法があるが, 何れも前処置を要し, 操作も稍々面倒である。我々は Dalali 等 (1954) の報告せる経股静脈性の方法を追試したので茲に報告する。即ち臍部に於て強く腹部を圧迫し(我々は排泄性腎盂撮影法に於て用うる尿管圧迫帯を使用した), 鼠蹊部に於て18ゲージ針にて穿刺し, 両側夫々70%ウロコリン 25cc を15秒で注入して撮影した。本法は容易な方法であり, スライドにて図示する。

29. 蹲位膀胱撮影法 (dorsal cystography) 及び遷延性膀胱撮影法 (delayed cystography)

○後藤薫, 仁平寛己, 酒徳治三郎(京大)

Boyce 等 (1953) による dorsal cystography に就

ては, 第47回近畿集談会に発表した, 其の後の成績を述べ, 更に時間経過を追つての Stewart (1949) による delayed cystography に就ても報告する。

30. 70%トリオダンによる腎盂尿管撮影

川村太郎, 谷口馨(金大)

我々は7例の腎結核患者に70%及び30%トリオダンを使用して経静脈性腎盂撮影法を施行したが, 1)その影像に就ては, 全例に同時に施行したスギウロンの影像と比較して見ると30%トリオダン使用例ではスギウロン使用例に比して優劣の差はつけ難いが, 70%のものを使用した例ではスギウロンにより描写されない部迄造影されているのが見られた。2)副作用に就ては30%, 70%共に全身的に顯慮すべき反応を見なかつたが, 唯70%トリオダン使用例では注射部位及び上臍へかけての血管痛を認めた。

31. 不溶性 Urokon による膀胱レリーフ像

○後藤薫, 酒徳治三郎(京大)

Urokon を C. M. C. に溶解せしめ, 粘稠度を高めて膀胱腫瘍のレリーフ像を描出したので, 茲に報告する。

32. 経腰的大動脈撮影法

後藤薫, ○大森孝郎(京大)

Smith 等の方法による本法の腎血管像に就て第4回中部連合地方会, 第42回総会, 第47回近畿集談会に発表した, 更に其の後の成績を述べ, 更に第2及び第3腰椎間の低位穿刺による骨盤動脈撮影法を併せて報告する。

追加 経股動脈性骨盤動脈撮影法

(逆行性骨盤動脈撮影法の新法)

後藤薫, ○大森孝郎(京大)

骨盤動脈撮影法には経腰の撮影法と逆行性撮影法とがあり, 前者は直接的に第Ⅲ-Ⅳ腰椎の高さで大動脈を穿刺し, 後者は手術的に腓側大腿動脈を露出してカテーテルを挿入(市川式), 或は陰茎背動脈を露出して造影剤を注入して撮影する(大越一生亀式)。上記の方法は特殊の器具, 手技を要する欠点を有する。我々は両側大腿部を血圧計の圧迫帯を利用して下腿動脈の搏動を触れぬ迄強く圧迫して, 鼠蹊部で股動脈を直接16ゲージ針にて穿刺し, 70%ウロコリンを両側夫々25cc を迅速に(3秒以内)注入して骨盤動脈を撮影する方法に成功した。之は従来の報告に見ない簡便な新法であ

り、表題の如く命名し茲にスライドにて図示して報告する。

33. Epididymography の泌尿器科領域に於ける応用(第一報)

三矢辰雄, 三矢英輔, 佐々田健四郎,
成田裕(名大)

Boreau 等の方法に準じ鼠蹊部より精管を露出し、注射針を睪丸側へ挿入70%ヨードピラセトンを注入直後及び数分後に撮影を行つた。本法によればEpididymography と Vesiculography の両者を一時に得る事が出来る。吾々は不妊症、陰萎、血精症、睪上体結核等計10数例に実施し、睪上体結核の診断法として優秀な方法である事を知つた。尚生殖器機能的障碍による疾患には、今後の研究に待たねばならない。

34. 開設以来5カ年間における黒部厚生病院泌尿器科結石症の統計的観察

玉置明(黒部厚生病院)

昭和24年9月1日、開設以来の結石症例63例について、頻度、性別、年齢、職業、地域別及び上部尿路、下部尿路について述べ、治療法についても統計的に観察す。年を追うに下部尿路結石は増加は認められないが、上部尿路結石は著明に増加して来ている。

追加 岡直友(名市大)

最近5年半に本学泌尿科で経験した尿路結石の統計的の追加を行つた。尿管結石が最も多い。治療法として特に尿管結石は下端部(膀胱壁部)のものはさておいて、それ以外の尿管結石では、大きさにもよることであるが、(短径0.7cm以下のものは自然排出容易)、自然排出は高率に期待出来る(約53%)ので、先ず姑息的療法を行い、止むを得ざるものにはじめて尿管截石術を行うのがよいと考える。

35. 尿路結石の実験的研究(予報)

今北力, 蔭山亮市, 児玉正道, 大江昭三(阪大)

D₂ 過剰投与時における尿路結石形成機転について血清中の蛋白分析を行い、R.N. 及び C_a 量を測定し蛋白代謝の異常をみとめ、これが腎臓の変性萎縮、石灰沈着と相関聯して、結石形成の1つの因子をなすものとする。

36. 泌尿器科領域に於ける P³² による実験的研究(第6報) 実験的結石腎の磷代謝に関する研究

宮崎重, 仁平寛己, 八田栄造, 杉山喜一
山崎巖(京大)

人尿路結片又は亜鉛片を一側腎盂内に挿入せる家兔に P³² を静注し、24時間後失血死せしめ、両腎皮質、髓質に於ける磷代謝状態を定量的に測定した。詳細は後日原著で発表する。

37. 腎結石症に於ける分離尿の遊離アミノ酸のペーパークロマトグラフィー

片村永樹(京大)

腎結石患者に於て、両側分離尿を採取し、患側及び健側夫々の遊離アミノ酸をペーパークロマトグラフィーによつて定性し、興味ある知見をえたのでこれを報告する。

38. 特異なる腎疾患に対する部分的腎切除術の経験に就いて

金沢稔, 瀬川陽一, ○前田行造(和歌山大)

第1例52才男。右腰背疼痛、右腎圧痛を主訴とした。術前ピエログラフィーでは右腎盂前方に廻転せる如き像と水腎症の所見を呈したが、手術時一見上極の腎硬塞を思わしめ、之の部の部分的切除を行つたが、組織学的に限局性化膿性腎炎であつた。

第2例42才男。10数年来両腎結石があり、昨年某病院にて右腎剔出を受けた。本年血尿及び腎鈍痛を訴えたものでレントゲンにより左腎に3ヶの腎杯結石を認めた。

残存腎の部分的切除に鉗子使用は禁忌であるのを知つていたが試みに8' かけ実質6gと共に結石3ヶ剔出した。術後30分300ccの排尿があつた。

認むべき腎機能障碍のなかつたのは鉗子使用時間を極端に節約した為と剔除実質量が極めて少かつた為と思われる。

第3例18才男。レントゲン所見は明かに左水腎症であつた。手術に際し大動脈より腎下極に至る動脈があり、腎盂下部を圧迫しこの途中より出した分枝が内精系動脈より下極に至る分枝と吻合をし更に下極より尿管に沿つて走る血管があり、尿管が屈曲をして居り明らかに異常血管による水腎症であつた。よつて腎盂整形を行い、之等血管を切断し異常血管支配領域の下極の部分切除術を行つた。

39. 腎盂尿管重複畸型の四例

谷野博(谷野病院)

- 1) 22才女子 右過剰尿管の膀胱外開口の症例で川添式方法により治癒。
 - 2) 55才女子 左腎重複腎盂兼重複尿管, 右腎膿腫の症例。
 - 3) 28才男子 両側重複腎盂兼重複尿管の症例。
 - 4) 22才男子 左側重複腎盂兼重複尿管の症例。
- 2)~4)は診断のみ, 上記ピエログラム供覧す。

40. **Sponge Kidney (cystic disease of renal pyramids) に就て**

酒徳治三郎(京大)

51才男子。主訴：血尿及び腰痛。腎盂レ線像にて **Cacchi** 及び **Richi** の報告による **Sponge kidney** の特徴ある所見を有し、摘腎についてこれを検索した結果、極めて稀な本疾患なることが判明したので、その臨床および病理について述べると共に、文献的考察も併せ行つた。

41. **Grawitz 氏腫瘍の筋肉転移例**

上田泰章(京府立大), ○高石喜次(伏見分院)

63才男子。家族歴、既往歴に特記事項なし。昭和28年8月本学皮泌科に於て、左副腎腫の診断のもとに左腎摘出。退院後1ヵ月程して手術創下部に漸時腫大する腫瘍を認め、其後食思不振、腹部膨満を訴へ昭和29年4月14日入院。手術施行時、皮膚可視粘膜は貧血状。淋巴腺の異常腫張なく、胸部のX線、理学的所見陰性。昨年施行せる術創下部に、小児頭大、弾力性ある固い腫瘍をふれる。開腹所見で、肝、脾正常。腹膜、腎摘出後死腔に腫瘍再発はない。摘出腫瘍塊は、

290gr. 14×8×6cm. 組織学的にも **Grawitz 氏腫瘍** である事を確かめた。斯く全身の他の臓器に何等の変化なく、前手術創最下端部にのみ転移を来して居る所見より此の腫瘍は、何等かの方法、即ち手術腔よりの分泌物、又は手術時に此の場所に移殖せられたものではなからうかと考える。

42. 所謂 **Grawitz 腫瘍** の三例

外松茂太郎(京府医大伏見分院), 幹滋(京府医大)

- 1) 60♂, (左側), 主訴は間歇的血尿と、左側腹部の鈍痛。摘出腎は 14×9.5×6cm, 580gr で腫瘍は上極後面に発生。
- 2) 62♂, (左側), 主訴は間歇的血尿と左側腹部の腫瘤。摘出腎は 15×8×7cm, 420gr で、腫瘍は前部下極に発生。
- 3) 50♂, (右側), 主訴は間歇的血尿。摘出腎は

13.5×9×6cm, 495gr で、腫瘍は中及下極に発生。

組織学的所見では2), 3)に於て、腺様構造, **cystisch, papillös** の所見を見、又細尿管の面影を止める様な像を見たので報告した。

43. **腫瘍を伴う孤立性腎嚢腫の1例**

岡直友, 後藤武(名市大)

1850年 **Hare** により、孤立性腎嚢腫の手術例が報告されてより、その後の報告は比較的少く本邦に於ては50例に過ぎない。その中腫瘍を伴うものは更に少く本邦にては5例のみ、又外国文献の症例を併せてもわずか39例に過ぎない。処で我々の症例は明らかに二次的に腫瘍を併発したもので腎腫瘍による嚢腫状変性とは思われない。この様な例は以上のべた文献中には見当らず、病理学者 **Arthur C. Alleu** の **Hand Book The Kidney** に **Adenoma** の発生せる摘出腎が記載されているに過ぎない。此処で本症例の病理組織的検査を行い、**papillöse Adenoma** と判明、簡単に報告する。

44. **腎腫瘍の転移について**

加藤篤二, 八田栄造, 片村永樹(京大)

腎腫瘍の蔓延特に転移について、20年間に20例を追求し得たから、之に就て綜括的に述べる。肺転移が11例をしめ、血行伝搬の著しい点は注目に値する。その他異型の転移例を述べ。詳細は原著に譲る。

45. **副腎皮質腫瘍による Cushing 氏症候群の治験例**

楠隆光, 阿部礼男, 小林鴻(新大)

臨床的に定型的な **Cushing 氏症候群** を呈した12才少女の例に対して、術前に諸検査を施行し右副腎皮質腫によるものと診断し、適切な **Hormon management** を行つて右副腎切除術を行つた。術後5ヵ月経過した現在著明な症状の消退をみているので症例の概要をのべた。更に副腎病変の診断法殊に所謂 **Cortisone-test** と手術に対する疵護法について考按を加えた。

追加 市川篤二(東大)

楠教授が **Cushing 氏症候群** の手術に成功されたことは、泌尿器外科の領域を拡大する意味に於て大いに祝福すべきことと考える。

自分には **Cushing 氏症候群**, 副腎生殖器症候群の各1例の失敗例があるが、今回の副腎生殖器症候群は手術に成功した。失敗例は何れも3年前のものでホ

ルモンの入手困難な時代のものであり、殊にクッシング氏症候群の方は成書に記載されている通りStressに対する抵抗が弱く腰椎麻酔のみで死亡した遺憾な例である。

追加 市川篤二(東大)

副腎生殖器症状群患者(2年9月の女兒)に左側副腎腫瘍を証明し、是を剔除して腺腫であることを証明した。尿中17-Ketosteroidの排泄量は術前100mg/24hrs前後、最高177.4mg/24hrsを示したが、術後は激減して4日目、6日目、8日目に於て1.8~1.3~0.8mg/24hrsとなつた。総chemocorticoidの排泄量は術前、術後を通じて略々正常、術後12日目には2.3mg/24hrsであつた。詳細は原著にゆづる。

追加 楠 隆光(新大)

副腎の剔除術で問題となるのは手術々式よりも、その診断及びホルモン関係の術前から術中及び術後の処理にある。即ち、外科的の事よりも、寧ろ内科的、特にホルモンの要素の方が大切なのである。故にこれ等の手術には従来我々の持つてなかつた方面の知識を必要とする。我々は此の要求にそうべく勉強して、今後副腎疾患を処理したい。

追加 市川篤二(東大)

自分の記憶では我々の学会で副腎皮質の疾患について報告したものは昭和22年大阪の総会で自分が報告した副腎生殖器症状群だけではないかと思う。

会員各位と協力して今後此の方面も開拓してゆきたい。

46. 睾丸腫瘍の2例

上月実, ○黒田政重(神戸大)

最近吾々は2例の睾丸腫瘍を経験し組織標本によりSeminomと診断された症例について大要を報告した。なお1例について、Freadmann反応及17Ketosteroidをしらべたが、Freedmann反応陰性、17Ketosteroidは術前高値を示したが、術後平均値となつた。

47. 後腹膜腫瘍について

加藤篤二, 酒徳治三郎, 日野豪(京大)

腎腫瘍と間違い、易い後腹膜腫瘍の臨床例について統計的観察を下し、ついで1)3才の♀の交感神経芽細胞腫 2)38才の♀の肉腫症例をあげた。

48. 尿管S状結腸吻合術の予後に就て

清水圭三, 阪野正之, 成田裕, 瀬川昭夫(名大)

教室に於ける尿管S状結腸吻合術施行例24例(中全膀胱剔除術例14例)の予後を調査し報告した。性別では男18例、女6例、年令別では50才台7例で最高、40才台及60才台は各5例、30才台4例で20才以下は3例である。病名では膀胱癌17例膀胱乳癌腫2例、萎縮膀胱2例、膀胱隆腫2例、尿管隆腫1例である。予後は生存者14例(3年以上3例、2年以上2例、1年以上4例、半年以上3例、3カ月以内3例)である。死亡者は8例(1月以内3例、3月以内4例、半年以内1例)である。尚不明は2例である。

追加 岡 直友(名市大)

本学における膀胱に膀胱全摘出と両側尿管S状結腸吻合術を行つた2例を追加する。

血中cl値は術後430mg/dl。前後に上昇するも半月乃至1カ月後には下降する。術後の上部尿路の模様を経筋脈性腎盂撮影法にて検討したが、造影剤排泄開始の模様は両例とも両側において正常であるが、いずれの例においても左右何れか1側に上部尿路像の拡張が見られた。いずれも術後30~60日後までの検討である。

49. 尿管閉塞症の1例

中村正道, 松下嘉三(富山県立)

18才の紡績女工、1年半以来仕事に従事すると右側腹部の疼痛、悪心、嘔吐があり、安静にすると消失すると云う。右腎は臍位の高さにて触知可能。膀胱鏡検査にて右側は尿管カテーテルは2種挿入されるのみで液の注入は不能。レ線像にて結石を認めず、右腎尿管の全剔除術を施行するに尿管は膀胱直前部にて細い索状物となり内腔は閉塞されていて液を注入するも該部を通過しない。組織学的には腎盂粘膜の出血、血管周囲、粘膜の細胞浸潤あり。上部尿管にも細胞浸潤を認め、腎盂尿管炎の像を呈す。尿管閉塞部は細胞浸潤強く肉芽組織となつて内腔は閉塞されている。

50. 坐骨直腸性前立腺摘出術について

清水圭三, 吉川康史, 佐々田健四郎(名大)

最近当教室で前立腺結核2例、前立腺癌2例について坐骨直腸性前立腺摘出術を施行した。各々の症例を簡単に説明した上、手術方法に言及、最後に前立腺摘出には恥骨後切開で入つて経膀胱性、避膀胱性及び会

陰部より入るもの、今回報告した坐骨直腸性に入るもの等あるが、目的によつて方法を選択する必要がある。前立腺を精囊と共に取る場合、以前に腹部より膀胱及前立腺に手術施行済の場合等は坐骨直腸性に行うが優れていると思う。

51. 前立腺剔除術後の恥骨々髄炎症例

裕 省吾 (国立千葉病院)

76.5.29年5月12日 Retropubic Prostatectomy 後6月17日恥骨々髄炎を合併しペニシリン療法により恥骨部の圧痛、及起立不能が回復しないため7月16日恥骨穿鑿を行い、組織的には骨萎縮の像ではなく炎症なることを明かにし、且外科的侵襲により恥骨部圧痛等の自覚的症状の軽快等を短時日の中に可能ならしめ得た。

追加 楠 隆光 (新大)

我々の教室では150例以上の恥骨後前立腺剔除術を施行しているが、恥骨々炎は1例も見えていない。即ち、欧米の報告より少ないが、その原因は日本人が余り肥満した人がないにある様に思われる。

追加 市川篤二 (東大)

東大泌尿器科に於ても恥骨後前立腺剔除術に際し、恥骨々髄炎を惹起した例はない。アメリカの文献にちよいちよい見えるので一昨年渡米の折2、3の専門家の意見をたたいて見たが、原因と思われる因子は判然していない。我々が経験のないことに対しては、これは手術がうまいからだろうと笑つて答えた。

52. 尿道下裂の治験例

並木重吉 (国立金沢)

本症の患者に Edmun, Thiermann の手術に従つて行つたものである。

53. 先天性括約作用不全による尿失禁に対する手術治験例

○関村平, 松本録一 (秋田日赤)

54. イルガピリンの泌尿器科的応用

稲田務, ○後藤薫, 山崎巖 (京大)

イルガピリンを用うると cl 及び水分の体内滞留が起こる。之は視丘下部及び脳下垂体ホルモンの介入を伴う神経と関係があると云われる。之らは自律神経と関係があると考えられるから、本剤を自律神経症と密接な関連を有する夜尿症及び他の泌尿器疾患に応用し

たので、その成績を報告する。

55. 尿路の前癌状態について(第3報)

加藤篤二, 山崎巖 (京大)

尿道ロイコプラキエ(主として尿道狭窄部に於ける)並に癌を合併せるロイコプラキエ症例を検索し、之と教室に於ける既往の原発性尿道癌とを比較し、癌発生の母地について考察を加える事とした。

56. 尿道粘膜麻酔の研究(その2)

今北力, 馬場正次, 中尾正敏(阪大)

紙本佐平(薬局)

尿道麻酔剤として従来用いられてきた水溶液の形のプロカイン等の麻酔薬の改良として、Corbus, Muschat, 落合氏等が発表された新しい溶剤の処方若若干の改変を加えて使用したが、粘膜面に長く又広く作用する故麻酔作用は強力で、又本剤自体が潤滑剤の働きをするので器械の挿入が甚だ容易であつた。又本溶剤に溶かした場合のプロカインは水溶液の形に比し流血中への吸収が少いことが判り水溶液に比し、濃度を高めても安全ではなからうかと推察される。

57. 類宦官症の一例

巽 裕彦 (奈良大)

本症が Tandler 及び Gross により命名されてから比較的多くの報告があり、先に其の1例を経験し、テストステロン並びにシナホリン、メガビオン等を用い、見るべき効果を収め得た。更に今回本症を治療する機会を得たので加療中ではあるが追加報告する。

58. 男子性腺發育不全2例について

酒徳治三郎, ○ト部敏人(京大)

ホルモン療法による臨床経過を述べる。

59. 人精子の電子顕微鏡的研究

三矢辰雄, 大森敏直, 相木正義,

高柳富輝, 三島力(名大)

吾々は健康人の精子に就て、無処置、化学的処理、物理的処理及び特別処理せるものに電子顕微鏡に依り之を形態学的に亦精子内部構造的にも検索し更に追求した。亦性器疾患々者の精子に就いても前者と比較研究したので報告する。

60. 陰莖淋巴管拡張症に就て

近藤厚, 渡辺克(岐阜大)